

旅を通じた異文化理解

Understanding cultural differences through travel

——富山国際大学中国異文化研修の旅

Toyama University of International studies intercultural
Study trip to China

湯 麗敏

TANG LIMIN

1、はじめに

夏休みの休暇を利用して中国現地での異文化研修を実施して以来今年で、もはや六年目が迎えられた。現地への研修に行くまでに、まず事前準備として15回に及ぶ中国事情を学ぶことに加えて、渡航へのころえと現地の学生との交流のためのプレゼンテーションを行うことに決まっている。現地での研修期間はたいてい一週間程度で、現地の歴史、文化、風俗習慣、語学などの内容に含まれる座学と見学、世界遺産、歴史的な名所旧跡などを巡る旅もする。また現地の同世代の若者、学生たちとの実地での交流、街中の自由自在な散策なども研修プログラムに組み込まれている。研修終了後には参加者全員に研修レポートを提出してもらうことになっている。それによりこの異文化研修という科目の単位は2単位付与となる。

なぜ日頃の安逸な生活範囲から抜け出して旅に出るのか、何のためにわざわざ見知らぬ異文化の世界に入って体験をする必要があるのか、人によって、その問いに対する答えは違うだろう。本稿は異文化研修という旅のリアルな意義及び旅を通じた異文化への理解、さらにより有意義な異文化研修の旅のあり方について考察することを目的とする。

2、異文化体験および異文化理解の重要性と必要性

文化人類学者である青木保氏の『多文化世界』に「私たちはこの世界が「多文化世界」であること、それをよく認め合うことに生きる条件があるということをきちんと認めたいうえで、それぞれ国も地域も文化も異なるところに生きる人間の共通項を探っていく努力を、もっと本気になってする時代が来たと思います」というふうに述べていた。

私たちの異文化研修の旅はまさに文化が違ったところに入って人間の共通性や違いを探ることのために行き、そしてその違いを認めようとする寛容の心を育つための行動である。

国際化、グローバル化が進む中、異文化間の衝突が増えつつある今日において、異文化体験による異文化への理解という重要性和必要性も顕著になりつつある。

そもそも、世界事情は常に変化しており、各地の風土や社会や文化なども多種多様である。人間生活は、言うまでもなく、必ずしも順風満帆なことではない。常に快樂と苦勞が入り混じる中、日頃人種・言語・習慣などの違う人との出会いもあれば、価値観の違い、生き方の違い、もの事に対する認識・理解・判断などの方法が違う人との出会いもある中で、時には自分には順当な事柄が相手には理解してもらえなかったという場合も多々起こる。異文化間のトラブルは起こるべくして起こっているといっても過言ではない。逆に異文化への理解と配慮があれば、文化の違い相手との間のトラブルも排除につながる。互いに良い気分にも置かれるだろう。

一方で、グローバル化の進行により、異文化とのふれあいが以前よりもずっと身近になったこともまた事実である。実は我々が中学校から外国語を勉強し始める時からすでに、自国と違った文化に触れ、大学では、外国人教員の授業も受けながらまた同じキャンパスで大学生活を送っている文化背景が違った外国留学生も数多くいるので、このような異文化に対する受容度を高めてきた。さらにいわゆる国境なしの小説や映画や音楽などのメディア媒体によりいろいろな形で異文化との出会うチャンスも実に少なくない。知らず知らずのうちに、異文化「体験」をする機会が多いのも現代社会の特徴である。一昔では考えられなかった状況が今ではもう日常茶飯事のようになっており、異文化から逃げようと思っても、逃れられないのが実情である。地球がますます「小さく」なっていくなか、異文化同士の出会いの場面は増えており、文化圏と文化圏の境目はあるところでは稀薄に、あるところでは鮮明になりつつあり、それが一層の異文化間の衝突を引き起こしている原因にもなる。「戦争」はその衝突のもっとも醜悪な副産物の一つである。異文化との接触を断つことができない以上、共存共栄を図ることでは、人類社会が生きる道はないのである。

このような背景に富山国際大学は異文化理解を深めるとともに、改めて自国の歴史と文化への理解と認識を深めることを目的とし、コミュニケーション能力、広い視野を持つ国際社会・地域社会に貢献ができる人材の育成をするために「異文化研修」という科目を正規の授業科目のカリキュラムに組み込んでいる。毎年の履修者は少なくなく、海外での実地研修に参加する学生数も徐々に増える傾向にある。

過去6年間中国現地での異文化研修参加者数は次の表の通りに示される。

2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
5名	6名	13名	6名	8名	14名

異文化研修という科目を正規の授業として半期週一回計15回実施するうえに、夏休み中に約一週間の現地研修を実施することとなっている。

現地に入ったらそれこそ完全なる異文化に取り囲まれる。一日朝昼晩三食の食べものから、食べ方、使う食器、食事の雰囲気まで、日本とは違うものになる。また研修講座の担当者は日本人教員ではなく、現地教員がされる。周りは研修参加者以外に全部外国人であり、交流の相手も現地のひとと学生である。宿泊は必ずしもホテルではなく、学生の寮も利用させていただいている。さらにトイレ事情もお風呂シャワーも部屋の設備も住み慣れた日本とだいぶ違う。そればかりではなく、見学先の施設、内容、名所旧跡への見学、それについての歴史文化、その地域の伝統、人々の生活習慣など諸々の違いを目の前にして、プログラム参加の学生たちは否も応もなくさまざまな形で異文化体験をする。ただし、この体験を自分の中に取り込めるかどうかはその文化に対する正しい認識や知識のあるなしに加えて、当本人の「異文化受容」に対する気持ちが大事となる。現地研修実施の前の15回の講義はその準備に充てられており、正しい知識の習得と認識の体得があって初めて、異文化への理解が深化していく。

本カリキュラムの習得は、学生たちの今後の人間形成にきわめて積極的な役割と深い意義を与えると考える次第である。

3、 旅による異文化体験

我々の異文化研修プログラムに座学と現地の学生との交流のほかに、必ず現地の歴史文化遺産あるいは観光名所めぐりも組み込まれる。例えば一昨年は天津と西安へ、去年は大連と北京へ行ってきたが、「兵馬俑」や「青龍寺」、「万里長城」や「故宮博物館」など、世界でも評価の非常に高い数々の文化遺産や歴史遺産を見学した。

なぜ異文化研修にもこういう見学の旅もしなければならないのかという質問が投げられてくるかもしれないが、そもそも我々が求めている旅の目的はただの物見遊山ではなく、その土地の自然環境、伝統文化、歴史、その地元の住民たちの暮らし方などを学生たちに知ってもらい、異文化への理解を深めてもらうための旅である。行き先を決めることにしては、まず学生たちの希望によりきめられたので、たとえば北京の旅を例にしてみれば、学生たちは事前勉強を通して北京を多少知っているけれども、それがただ本と伝聞によるものであって、自分の直接的な見聞と体験ではなかった。学生たちが、現地で万里長城を登りながら、どうして万里長城は建造されたのか、それについての歴史と文化をその場で勉強し、万里長城の雄大さを目の当たりにして、はじめていろいろと考えさせられた。汗を流しながら目指しているところまで上がった瞬間にその達成感や感動は上がった人しか感受ができない。また日本のテレビでよく見慣れた天安門広場と現地でこの眼で見られた天安門広場のイメージと感じされた雰囲気が違ったものもあることを確認ができた。さらに北京の伝統的な家作りの四合院「胡同」のめぐりを通

して、今までに保ってきた古来北京の庶民の生活環境と暮らし方がわかるようになった。そのような旅の体験により普段の生活では出会えない考えを持った人、生活、文化、言葉に触れることができ、その土地の全体の雰囲気や風土を味わえ、その人々との直接の交流を強く求められるのが旅の本当の目的としているのである。

そのような活動を通してもたらした感動と喜びと楽しみが確かに忘れられないほど印象が強かった。それと同時に新奇と不案内で自分が異国他郷にいることを、そして旅をしていることも強く意識させられた。

大連から北京へは、飛行機の代わりに列車を利用した。長い時間がかかった列車の旅であったが、それにより旅もいっそう充実で、楽しくなった。なぜならば見知らぬ人と同じ車窓で二段ベッドを分けあう経験を学生たちに体験してもらった。狭い空間でお互いに言葉が通じない相手との交流は手振り身振りでなんとかうまくいった。時にはお互いにつたない英語でコミュニケーションを取ろうという努力もされたようだ。このような地元の方との自然体の交流は、大学のキャンパスにはなかなか見られない光景であった。学生にとっては本当にありがたい貴重な異文化体験の良いチャンスになった。それで列車を利用する価値も十分高められた。

以下は大連で真夏の森林公園を一周りした後の一シーン。

满面汗だらけの学生がお土産の売り場に来て、のどが渴いた—という悲鳴が上がったところに、そばにちょうどお茶を満杯入れた瓶を手に持ち、涼を取っている年寄りのおじいさんがいた。言葉が通じたわけでもないのに、おじいさんは自分が飲んでいるお茶を惜しまずに本学の学生に差し入れて飲んでくださいとすすめてくれた。「いいですか」、「どうぞ」、「わいーやった」と喜んで飲んだあとに学生がしきりに「謝謝、謝謝」とお礼を申し上げた。このようなことは日常生活に、友達同士の間では別に珍しいとは誰も思わないけれども、異国にて、このような温かい人情味が味わえることによって、世の中のお互いの思いやりと真の「理解」ということが説教ではなく自分の体でわかり、理解もいっそう深めるようになった。それこそいわゆる草の根の交流と異文化理解の最高の境地になるのではないか。

日常生活から飛び出して旅にでることは、住み慣れたところから見知らぬ地域への地理的な移動だけではなく、なじみの文化圏から異なる文化圏への移動ということも伴っていることだ。異文化の環境におかれた私たちは異文化を体験しながら一方で自分たちがもといいた場所を「外」から眺めるという経験もするのである。「井の中の蛙大海を知らず」ということわざの言う通りに外から見ないと自分自身の真の姿は分からない。今まで往々にして一つの物差しでもの事を見ていたが、外国へ行って、いつもと違った刺激を受けながら、視野と見聞が広げられることによって、新たな価値観を得ることもあるし、より俯瞰的な見方を体得することにより、既存認識への理解も複眼的になり、多面的な考察を可能にする。学生が書いた研修レポートを読むとはっきりわかる。

「1週間中国で過ごして、日本のテレビで見ることと自分の目で見ることでは、印象が変わると分かった。」

「富山空港につき、朝と同じ場所にいたとき、一週間前とは違い、中国へ行きたくないなあとかの不安は一切なくなっていた。あったのは楽しかったし、何より貴重な体験ができたとする満足感だった。」

「中国にいて一番思ったことは中国の人に笑顔が少ないということです。日本では誰にでも愛そうよく笑顔を取りますが、中国ではあまり笑顔の人を見る機会がありませんでした。これも日本と中国との文化の違いの一つであると思います。」

「初めは尖閣諸島の問題と自分の持っている勝手な印象から中国へ行くのをあまり楽しみにはしていなかった。しかし、実際に中国に着いてみると楽しいことがたくさんあった。たとえば森林公園でアルパカと戯れたこと、ロシア風情街の露店で買い物をしたこと、夜行列車に乗ったこと、万里長城に登ったことなどあげてみれば尽きない。確かに日本から見れば道路やトイレが汚れたり、車や人の交通マナーがよくなかったりして、不快な思いをしたこともあったが、これこそ異文化であって今回の研修旅行に必要なことの一つだ。今後は、中国で自分が感じたことを大切にしながら新しい価値観で視野を広くもてる人間になろうと思っている。」

「日本人は中国人に対しマイナスなイメージが多く、中国人も同様にそうなるかもしれないが、両者を学ぼうとしている人、たとえば日本語を習っている学生、ガイドを務めてくださった皆さんは私たちにとってもとても優しく親切で楽しい時間を与えてくれた。日本が思っている物事と実際のものではやはり大きな違いがあるのではないかと考えさせられた。」

「学んだことはやはり何ことも知ることが大切ということ。外国の人との交流というのはとても遠いようでいて意外と身近な何かに近づくよりずっと簡単なことなのかもしれない。と私にそう思わせてくれた一週間だった。これからうちに入れるに寛容、外の出るに柔軟であるようにまた語学も学んでいきたい。」

「中国の面積は広く、大陸の国なので、長く緩やかな川が多い。そのため汚染された水がなかなか流れていかない。だが、工場からの排水を少なくしたり、下水道の配備を強化したり、環境に優しい洗剤など開発したりなど中国の経済成長の威力を環境面にも生かしていけば少し

ずつ改善される見込みはあると思う。経済成長まっただ中の中国にはたくさんの可能性がある
と私は思う。」

「私は今回の異文化研修を通して、確かに国ごとに違いはあるけれど、みんな同じ人間なのだ
など改めて感じた。文化や習慣は違うけど互いにそれを理解しあい、受け入れていくことが大
切だなと思った。新しい文化に触れることは不安があるが、異文化研修の旅を通してさらにた
くさんの文化に触れていきたいと思うようになった」

以上は大学入学して半年にもならず、18、19才の学生たちが書いた感想文のごく少ない一
部分の紹介である。日頃、いつも家から大学の教室、それからアルバイト先までという狭い範
囲での行動、単純な日々を過ごしている学生たちが従来とは異なる環境の中で、ショックを受
け、刺激も受け、感動、感激しながらも、よく観察、考察し、物事に対する自分の見解、判断
力、異文化に対する包容と寛容の気持ちを持ちつつことが書いたレポートからよくうかがえる。
この彼らが今後の社会の担い手であり、それを育てていくのも異文化研修の目的の一つである。

4、異文化研修という旅のリアルの意義と成果

飯田芳也氏は『観光文化学』という著書に「旅の原点」についてこう論じた「(一) 旅する
ことは、異質の新しい文化に接することである。(二) 異質の文化に接することによって自己
をよりよく知ることができる。(三) 異質の文化の価値を認め、相手から学ぶ柔軟な姿勢が大
切である」。異文化研修の旅はまさに飯田氏が指摘されたような旅であった。旅を通して、学
生たちが身に付けたものは言葉で言い表せないほど多かったはずだ。彼らは今の生活の枠組み
から一步踏み出し、大きな世界が自分を取り巻くことを知ることになったし、自分とは異質な
世界へ踏み出す一步が必ずしも難しいことではないことについて身を持って体感したのであ
る。研修体験は小さな一步に過ぎないが、今後歩いて行かなければならない「千里の道」の「初
めの一步」になるという意味で計り知れない意義を持つと筆者は思う。非日常的な観光の旅に、
常に珍しい、見慣れないことと人にばかりに出会い、感激も意外も満足も残念も伴うのが現実
である。自分と異なる物事との出会いを通じて、包容と寛容の心が育てられ、我慢と根気の精
神を培うことができること。また、大きな心で千差万別な世界を見る目が持てるようになるの
である。

異文化研修旅行に対する学生たちからの評価を見てみよう

「今回の研修で一番楽しみにしていたことは、日ロ戦争時で戦地となった二〇三高地を訪れる
ことだ。NHKのドラマで「坂の上の雲」に登場する二〇三高地には今もなお戦争の傷跡が残
っていた。この地でかつてないほどの激戦が行われていたかと思うと感慨深いものがあつた。

……研修を経て、中国に対する関心が如実に増した。また来年留学する際には、もっといろいろな土地を観光したい。今回は有名なところばかりの観光でとても刺激になり、現地の人とのたどたどしい会話もいい経験となった。習った中国語がすぐに出てくることは少なかったが、それでも徐々に出てきて、中国語を勉強した甲斐があった。一週間という短い期間ではあったが、貴重な経験が多くでき、実りのある研修だった。」

「今回の異文化研修を通して自分がいかに狭い環境の中で生きてきたか、また日本がいかに安全な国であるということが分かった。そしてこちらが日本人だとわかると笑顔で「こんにちは」と言ってくれた北京のおじいさんを見て、大連の日本語専攻の学生が「日本に行きたい」と言ってくれたのを聞いて、中国全体が反日感情を持っているのではなく、一部の人の反日感情やデモ活動が日本のメディアで大げさに取り上げられているだけだということも分かった。……また機会があれば中国に行きたいと思った。」

「この一週間日本にいただけでは経験できないようなことをたくさんすることができた。中国とはどんなところか知ることができたし、たくさんの人たちと触れ合うことができた。この経験を今後の勉強や人生に活かしていきたいと思う。」

わずか一週間ほどの体験は確かに学生たちの若く鋭い感受性によってそれぞれに受け止められ、彼らの血肉となったことがよくわかる。旅をして今までなかった経験は積み重ねられるだけではなく、彼らの生活態度、気質、精神状態まで良い影響を与えている。例えばちょっとした行動、あるいは偶然の出会いにより新しい知識、新しい発想法へのきっかけとなり、自分を高めるチャンスもそこから得られる可能性がある。旅による異文化体験のもう一つの意義と楽しみは「発見」ということにある。一番の「発見」は美しい景観だけではなく、自分自身への「発見」である。旅の中で他人を観察する以外に自分自身の姿も照らさせられる、考えさせられることにより自分自身をさらに知ることができる。それも旅の本当の価値の一つになると言えるのではないだろうか。学生たちは旅に出て、学校生活とは全く違うスケジュールで活動し、新鮮感あふれる毎日のなかで、感動的で刺激的な一週間を過ごすのである。近藤康生氏は『なぜ、人は旅に出るのか』（ダイヤモンド社 2011年）に次のようなことが書いてあった。「旅の魅力とは何か？」それに対して出てきたのは次のような意見だった。「非日常の経験。」「ずばり、異文化交流。その土地の文化に接し、言葉に触れ、そして人と交わる。それは勉強にもなるし、明日への活力にもなる。」ということのように、こちらが一週間の異文化研修国際観光での様々な出会いを経験して、学生たちが人間としての深みも、素養も身に付けて、これからなりたい自分に少しでも近づくができれば、教育者としてはこれ以上の幸いはない。

5、 終わり

「讀万卷書、行万里路」（万卷の書物を読み、万里の路を行く）という中国のことわざがあるように、万卷の書物を読むことにより、書物から得た経験や理論を理解し、また万里の路を行く、数千マイルの旅をする事により、自らの体験と観察で新しい世界を発見し、新しい人生観、価値観も再認識ができるということ。机上の学習と実地での研修は知識の習得においてはどちらも欠かすことのできない両輪なのである。日本の教育システムは前者に傾倒しがちだが、今後は実地研修の機会を増やしてやらなければならないと考える。また学生たちが参加したいと思ってもらえるように、魅力的なプログラムを提供することが重要であり、本学での経験上、学生たちにはできるだけ自主的に異文化研修のプログラム作りに参加してもらい、観光先も含めた異文化体験の内容は彼らの意見もくみながら決めていくのがよいだろう。主体的にプログラムの企画に参画させることで、学生の能動性が高まり、より積極的に異文化研修という講義に取り組むことができるのである。

異文化研修の旅は一週間で終了するが、この貴重な経験はきっとこれから学生たちの勉強や生活に活かされ、また自分の目で見たものと肌で体験したものがきっといい「思い出」以上の何かを彼らに残していくだろう。旅から戻ってきた学生たちの中では小さいながらも確かに変化が起こることを、毎度ながら感じる事が教育者としては大変にうれしい。学生たちの成長を見守ることは教師の義務であるが、それを実感できることは教師の醍醐味である。研修を体験した学生たちは今後長い時間をかけてさらに大きく変化を、成長を遂げていく。その姿には大いに期待したいものである。

参考文献

- 飯田芳也 観光文化学 2012年古今書院
- 藤巻正巳 グローバル化とアジアの観光 他者理解の旅へ 2009年ナカニシヤ出版
- 山口一美 はじめての国際観光学 2010年創成社
- 菊地俊夫 観光を学ぶ 2008年二宮書店
- 近藤康生 なぜ、人は旅に出るのか 2011年ダイヤモンド社
- 青木保 多文化世界 2003年岩波新書
- 青木保 「文化の力」の時代 2011年岩波書店
- 張 競 異文化理解の落とし穴 2011年岩波書店
- G・ホフステード 多文化世界一違いを学び共存への道を探る 1999年 有斐閣

